

第260回 今月読んだ本

福本和夫 思想の再解釈

ー「福本イズム」から「日本ルネッサンス史論」へ（13）

第7章 福本イズムの失墜（1927）

ーソ連共産党内の権力闘争と「27テーゼ」

コミンテルンの「27テーゼ」によって福本イズムは失墜する。戦前の日本思想史ではごく短く記述されるだけであり、何となく読んでいると疑問を抱くことはない。

よく考えてみると不思議な話である。「27テーゼ」は福本イズムも山川イズムも弾劾している。「分離結合」論も「大衆の中へ」論も否定しているのである。これでは組織論、運動論の方向性を見失うことになる。さらに、なぜこのタイミングで「27テーゼ」が出されたのか（「27テーゼ」の詳しい内容については後述）。再建党大会で正式に決議した内容をいとも簡単に否定されて唯々諾々と従うとは、日本共産党の主体性は全く存在していなかったのか。私たちは背景や深層を見ようとせず、歴史的事象のダイナミズムの表層だけを追ってはいないだろうか。

五色温泉での再建党大会の後、12月から1月にかけて市川正一、徳田球一、佐野学が出獄する。渡辺政之輔が大会の報告をする。佐野学は福本イズムに反対、徳田と市川は支持した。その後、伊香保温泉で佐野文夫、渡辺、福本、徳田が協議する。徳田と渡辺の対立が表面化して、結局は、佐野文夫が中央委員長を辞して徳田が就任することになる。

福本イズムに反対していたヤンソンは巻き返し工作を図る。ヤンソンは1926年10月末に鍋山直親をモスクワに送った。

ヤンソンも福本に反対なんだ。ぼくも福本理論を充分批判する能力はないんだ。けれども、あれはいかんということは組織人として感ずるわけだな。その「いかん」という人間をモスコーにやりたかったんだ、ヤンソンは。（前掲『思想と人間』240頁）

ヤンソンは北浦千太郎に論文「アンチ福本イズム」を書かせる（雑誌『改造』第9巻第3号、1927年3月、改造社、に掲載）。「福本イズム」という語の初出である。北浦論文は高橋貞樹による福本イズム批判を下敷きに作成されたといわれている。北浦は高等小学校を卒業後に印刷工として大阪・東京朝日新聞社、報知新聞社などに勤務して労働運動に参加する。モスクワの東方勤労者共産大学（クートベ、コミンテルンが設立した発展途上国、植民地の共産主義者、共産党幹部

の養成機関、1921-1938)で学び党再建に参画、市川が入獄後は『無産者新聞』の主筆代理を務めた。しかし、山川イズムに与する論説を發表したこと、党費を使いこんだこと、警視庁特高幹部と赤坂の料亭で会食したことを理由に党から除名処分を受けていた。北浦の背後にはヤンソン、コミンテルンがいることを再建共産党は気づいていなかった。

鍋山の派遣によってコミンテルンではブハーリンらが再建党大会の諸決定を予備検討する。その結果、否認する方針となった。コミンテルンから再建共産党へひそかに招集命令が発出される。1927年1月、草津温泉で協議した結果、福本、徳田、渡辺、中尾勝男、佐野文夫、河合悦三が派遣されることになった。これだけの人数の党幹部たちが出国できたとは驚きである。翌年の3・15事件と比べると特高警察などの監視能力が十分でなかったことを物語っている。

「日本問題に関する決議」、所謂「27テーゼ」をめぐる動きはソ連共産党内の熾烈な権力闘争、コミンテルンの対外政策などの諸要素が複雑に絡み合っている。「27テーゼ」を取り巻く状況について簡単に触れてみよう。

レーニンが1924年に死去してから1929年にスターリン独裁が開始されるまでの間に5年の空白がある。熾烈な権力闘争が繰り広げられた期間であった。レーニンの死後、トロツキー、スターリン、ジノヴィエフ、カーメネフ(1883-1936、トロツキーの妹と結婚、スターリンによって粛清)、ブハーリン、ルイコフ(1881-1938、スターリンによって粛清)、トムスキー(1880-1936、粛清前に自殺)の「7人組」による集団指導体制となった。スターリンは目立つ存在ではなかったが、巧みな合従連衡によって権力を掌握していく。

先ずは、ロシア革命の軍事面での最大の功労者である赤軍(革命軍)の創始者トロツキーを攻撃する。1925年、スターリンはジノヴィエフ、カーメネフと組んでトロツキーを赤軍から追放した。1926年から翌年にかけて、スターリンはブハーリン、ルイコフ、トムスキーの右派とともにジノヴィエフ、カーメネフの左派を党中央委員会から追放する。ジノヴィエフ、カーメネフはトロツキーと組んで右派に対抗するが敗北して1927年に除名された。1928年にはスターリンは左派に転じてブハーリン、ルイコフ、トムスキーの右派に勝利する。スターリンにとって右派、左派は権力闘争のための道具に過ぎなかった。どちらの立場がそのとき勝てるか、それのみが判断基準であった。

福本イズムがコミンテルンで討議された1927年はスターリン、ブハーリンらの右派がトロツキー、ジノヴィエフらの左派と権

力掌握をめぐる闘争の最中であった。中国革命の失敗が右派に焦りを生じさせる。1927年、蒋介石の上海クーデターによって中国共産党は壊滅的打撃を受け、国共合作（国民党と共産党の協力関係）を推進していた右派にとっては大きな政治的ダメージとなった。スターリンは、中国革命失敗を批判するトロツキーの論文をコミンテルン拡大執行委員会の各国代表に読ませることなくトロツキー弾劾を決議するという無理筋の強引な手法を用いる。

すさまじい政治闘争の最中、日本問題が持ち上がったのである。レーニン路線を否定するスターリンにとってレーニン『何をなすべきか』に依拠する福本イズムは極左以外の何ものでもなかった。しかも再建共産党がヤンソンの指導に従わないことはコミンテルンへの反抗を意味した。右派は左派に弱みを見せないためにも断固たる措置を取る必要があった。

日本問題の前にはドイツ共産党に対するコミンテルンの弾圧があった。1923年10月、ハイパーインフレで労働者が困窮して先鋭化している中、コミンテルンはドイツ共産党に暴力革命を起こすように指示してソ連から数百人の将校を送り込んだ。武装蜂起は大衆から孤立して失敗に終わる。蜂起計画の失敗によって、コミンテルンの方針は社会民主党系労働組合からの共産党系の分裂から共同戦線の呼びかけへと転換する。この方向転換はコミンテルン内部の権力闘争と絡み合って展開する。

ドイツ共産党内には激しく争う3つの勢力があった。テールマン（1886-1944、ナチ党によって殺害）らのスターリン派、マズロー（1891-1941、ソ連秘密警察によって殺害）、フィッシャー（1895-1961）らの党中央を支配する左派・ジノヴィエフ派、下部党員が強力に支持するローザ・ルクセンブルグの思想的系譜を受け継いだローゼンベルク（1889-1943）、カツツ（1889-1956）、コルシュらの極左派。

スターリン・ブハーリン派（右派）はジノヴィエフ派（左派）を追い落とししていく過程でドイツ共産党の粛清に着手する。テールマンに命じてフィッシャーらの党指導権を奪取させようとするが、下部党員らを支持母体とする極左派の反撃によって不成功に終わった。1925年、コミンテルンはドイツ共産党代表団をモスクワへ派遣させる。幾度にもわたる執拗な脅迫によってフィッシャーらを屈服させ、コミンテルンに従わない極左派は党から追放した。1年以上かけてモスクワとベルリンを両指導部が往来して、コミンテルンの要求はようやく実現した。1926年には福本に理論的影響を与えたコルシュも除名されている。

二カ年にわたる党内闘争とコミンテルンの外圧によるドイツ共産党のテールマンを中心とした再編過程はかつてのローザとリープクネヒトの党から、スターリンの君臨するソ連共産党の出張所と化する決定的な第一歩であったといつてよい。

1926年末、コミンテルン中央執行委員会から、日共（日本共産党―岩田注）に代表団派遣の要請があったときには、すでにこうしてドイツをはじめとするヨーロッパ諸国の共産党の再編成がおこなわれたあとであった。そして、日共においても類似の事情が、ひじょうに矮小なスケールではあるが、培われていたのである。（渡辺寛、前掲『福本和夫の思想―研究論文集成』125―126頁）

ドイツの先例に従ったコミンテルンによる日本問題の処理過程を時系列で追ってみよう。

1927年2月初旬、渡辺、中尾、河合がモスクワに到着。すでにモスクワにいた鍋山を加えて労働者階級出身者で「労働者団」を結成させる。前年に訪ソしてロシア共産党に入党した高橋貞樹の指導によって「労働者団」は福本イズムから転向。福本イズムに心酔していた渡辺を説得するのにかなりの時間がかかったという。続いて、「労働者団」転向のために時間差で日本を出発させられ4月下旬にモスクワに到着した福本、徳田、佐野文夫のインテリゲンチヤと「労働者団」が対立する構図となる。4月末、全員が福本イズムの誤りを認める。7月上旬までにブハーリンが「27テーゼ」を起草。7月15日、コミンテルン常任執行委員会議で採択。その後、ブハーリン、ヤンソン、片山潜の指導のもとに新しい日本共産党中央委員会が結成され、福本、徳田、佐野文夫は当面の間、党の主要ポストには就かないことになった。

先に進み過ぎたようだ。福本の視点でモスクワ滞在の様子を語ってもらおう。福本たちはコミンテルン内部の権力闘争、ドイツ共産党の屈辱的な服従については一切知らない。ロシア革命を遂行したレーニンに依拠する分離結合論はコミンテルンに受け容れられるはずだ。代表団は意気揚々と日本を発ったのである。

コミンテルン本部へ行くために準備を急いでいた福本に本郷本富士署から出頭通知が届く。代理でも構わないように読めたので、たまたま菊富士ホテルに來訪していた知人に行ってもらった。ある日のこと、佐野文夫、渡辺らと近くの喫茶店で会い、その後で前田寛治に用事があって会うことにしていた。すると、前田が私服刑事3人と一緒に入ってくる。前田が刑事たちに問い詰められて（殴られて）、喫茶店で会うことを話してしまった。本人が出頭しなければならなかったらしい。福本にとって出頭することは平気だったが、

その場に佐野、渡辺がいることが気がかりだった。刑事たちは緊張していたようで2人に気づかずに福本だけを連行した。和服だった福本は雑誌『マルクス主義』に寄稿された論文を懐に入れていた。処分に困った福本は本富士署に行くと腹が痛くなったふりをして、便所に論文を捨ててその上に便所紙を覆いかぶせて事なきを得た。出頭理由は議会解散請願運動（1926年6月に『無産者新聞』社説が呼びかけた普通選挙法実施のための大衆的請願運動）に福本が関係しているのではないかという疑いであった。1週間で釈放されるが、菊富士ホテルは不用心なので前田のアトリエに隠れることにした。

本富士署に拘留されている間に徳田は東京を脱した。しかし、京都祇園で遊興中に警察に捕らえられて東京に送り返される。渡辺は2人を待ちきれずに出発してしまう。福本は常尾行を巻いて抜け出す機会をうかがっていた。2月11日の紀元節（現在の「建国記念の日」）には警戒のためか目白署に拘留されてしまう。

ウラジオストックで福本、徳田、佐野文夫が合流したのは2月下旬か3月初旬であった。

佐文君はなぜか、ここですこしおくらされて、徳田君と私との二人だけが一緒に、同じ汽車で、ウラジオストックをたつて、モスクワに向かうことになった。佐文君一人を残してだ。どういう事情か知らぬが、へんな小細工のように思えて、どうにも不快であった。当の佐文君にしてみれば、それこそ憤懣の至りであったにちがいない。

（『裸像』102頁）

福本は「何かがおかしい」と気づいている。「労働者団」を転向させるための時間稼ぎだったことはもちろん知らない。

福本と徳田がシベリア鉄道の11日間の旅を終えて到着したのはモスクワの繁華街のひとつ、ゴーリキー通りに面したホテル・ルックスだった。コミンテルンの外国人宿舎になっており「世界革命本部」として知られていた。チトー（ユーゴスラビア大統領、1892－1980）、ホー・チ・ミン（ベトナム国家主席、1890－1962）、周恩来（中国首相、1898－1976）らが滞在したこともある。1921年にソ連に渡った片山潜はホテル・ルックスを宿舎にしていた。1933年に死去したとき、スターリンらが葬儀に参列してクレムリンの壁墓所に他の同志たちとともに埋葬された。片山は壁墓所に眠る唯一の日本人である。福本はホテルの名前を古代ローマの諺「光は東方から Ex oriente lux」からとったのではないかと推測している。

福本はヤンソン夫妻の部屋に2回招かれたことがある。1回は鎌倉で購入した上等の玉露をご馳走になり、目がさえて夜通し一睡も

できなかった。もう1回は1921年のアメリカ共産党創立に参加したフォスター（1881－1961、戦前は大統領選に共産党から3回立候補、戦後の全国委員長）を紹介された。ヤンソンは福本を部屋に招待したことは他の同志には内密にしてくれるように頼む。『裸像』で初めて明かしたのである。

片山は3階に住んでいた。福本が会ったときは67歳で階段の上がり降りが億劫そうに見えた。どんな小さな会議にも一度も欠かさず顔を出したが、老齢のためかほとんど発言もせず居眠りしていることも多かった。福本と徳田は「27テーゼ」による弾劾後は筋向いのホテルに移った。

私の部屋には、とくに二度もこっそりひとりで、わざわざたずねてこられて、したしくいろいろとうちとけたお話もきいたが、そのうちで、スターリンについて、「スターリンは無学だからね。こまったものだ」と、長嘆息されて、吐かれた言葉が、今もなお私の耳にのこっている。（中略）ソ連の第20回党大会（1956年、フルシチョフのスターリン批判演説で有名）以前に、私がこれをもらして、そのため万一片山氏の墓があばかれでもする結果になってはとの考慮から、これまではかたく秘して、誰にも語らなかったわけだが、今ならもう話してもいいであろう。同志片山、もって瞑すべし。（『裸像』108頁）

先着の「労働者団」に接した徳田は、どうやら雲行きが怪しいと察して福本批判に転じた。曰く、福本の理論的誤り（絶対君主制、急速転化の2段階革命説）は日本にいたときから気づいていたが、克服するためにはモスクワに連れてこなければならないので福本を支持するふりをしていたのだ、と。福本を「日本のレーニン」と称賛していた徳田の言葉を誰も信用しなかった。福本イズムからの転向に執拗に反対した渡辺は徳田に殴りかかったという。

福本は何月何日に誰が参加してどのような内容の討議が行われたかについては回顧しない。何か配慮していたのだろうか。断片的な回想から印象的な箇所を紹介しよう。

口頭で討論するより文書によって意見を提出する方がよいと考えた福本はヤンソンの許可を取り付けた。『福本和夫著作集 第2巻』の巻末資料には、旧ソ連マルクス＝レーニン研究所アルヒーフ（現在のロシア現代史資料保存センター）所蔵の2つの文書（原文の英文を邦訳）が所収されている。黒木による「日本における現下の経済・政治情勢の分析と我々の政策」（1927年5月8日）と「閥同志の攻撃に答えて声明す」（1927年5月9日）である。黒木は福本、閥はヤンソンの偽名である（レーニン、スターリン、トロツキーも本名で

はない)。広義の福本イズムをまとめた2文書には目新しい視点はないが、後者の「日本資本の安定の問題について」という項で「日本資本主義が世界資本主義の没落に合流しつつある」と書いた誤りを認めている。

日本問題小委員会で最も大きな会合はヤンソンの報告が行われたときである。ブハーリンは顔を出さず、司会者はイギリス共産党のマーフィー（1888-1965）であった。スターリンの秘書メフリス（1889-1953、政治将校、戦後の国家監督相）も同席していた。ヤンソンは、日本資本主義の没落説（ヤンソンは黒木が日本資本主義の安定説に転じたことは承知している）、分離結合論を全面的に否定する。福本が、ブルジョア民主主義革命から急速にプロレタリア革命に転化する2段階革命説をはっきり規定したこと、日本にはファッショ的傾向が容易に起こる可能性が高いことを強調したことは正しい、という報告であった。ただし、絶対君主制論は理解されず、天皇・資本家・地主の三位一体に固執していた。

コミンテルンの議長ブハーリンはいつも機嫌がよくて明朗な好人物のように見えた。

コミンテルンの一室で、はじめて会った途端に、やあ、タワリシチ・クロキ（同志黒木）といって、両手をひろげて、やにわに私を抱きあげてしまったのには、妙な挨拶もあるものだともまげてしまった。これよりさき私は2カ年半、ヨーロッパに留学して、方々の国々をあるきまわったのであったが、こんな挨拶をもってむかえられたのは、これがはじめてであった。

（『裸像』132頁）

ある小委員会で、佐野文夫らがブハーリンの『共産主義のABC』や『史的唯物論の理論』など多くの著作が愛読されていることを伝えると、ブハーリンは満足の笑みをたたえ子どものように喜んだ。河合が福本によるブハーリン批判を持ち出すとたちまち不機嫌になってしまい、それ以降はブハーリンの福本に対する態度が一変したという（第5章第1節を参照）。

日本問題小委員会が開かれている1927年当時、スターリン＝ブハーリン右派にとっての絶対的要請は次の3点であった。

第一に……世界中の共産党から左派的要素を取りのぞくこと……。福本イズムは初期レーニンに忠実だったが、初期レーニンに忠実であることは、この時点では、極左的であることを意味していた。

第二に、日本の指導部がヤンソンを通じてのコミンテルン中央の指示を無視するという、民主集中制の大原則を踏み外す行為をおこなったことは、それだけで百パーセント断罪に値することだった。(中略)

第三に、中国革命指導の失敗を償うためにも、日本の活動を盛りあげ、かつそれをもって中国革命に資するというのがスターリン指導部の基本的な考え方だった。ところが、日本の運動にその任務を課すには、日本の党はあまりに弱く、遅れていた。(中略) そんなにモタモタしないで(山川イズム、福本イズムの双方とも党拡大には障壁となる一岩田補足)、早く党を大きくして、ジャンジャン活動をやれ。

(前掲『日本共産党の研究(1)』136-137頁)

コミンテルンの幹部は福本の論文・著作の露訳、英訳に目を通して準備していた。討論に入るとすぐに福本は自己批判を行う。参加者たちは拍子抜けしたようだった。小委員会が終わって外国の同志が退席したときのことである。

渡政君(渡辺政之輔一岩田注)が血相をかえて、私に詰めより、自分はモスクワに先着いらい、さんざんやっつけられ、自殺してしまおうかとまでおもったほどなのに、君は非難攻撃されても一向に平気な顔をして、ニコニコと笑っている。まったく癪にさわる、とひどくくっつかかった。よっておもうに、私はこの日もおそらく、激昂するどころか、平気でニコニコしていたものと思われる。

(『裸像』126頁)

福本はブハーリンの認識の根底を推測する。日本共産党はこれから代数や平面幾何を学ぼうとしている段階である。ソ連共産党は高等数学の微積分学や解析幾何学を研究している。コミンテルン日本支部は微積分学や解析幾何学の講義を忠実にノートに取り棒暗記すればいい。

「それで、応用問題が解けるでしょうか。」「そんな余計な愚問をしてはならぬ。」「応用問題のことなど、支部ではすこしも考えるには及ばない。それは、ソ連の党やコミンテルン本部の考えることだ。支部では、公式だけ、棒暗記していればいい。わかったか。」「お説、よくわかりました。二十七年テーゼに何のまちがいもありえない道理もよくわかりました。」

(前掲『福本和夫初期著作集 第3巻』「はじめに」19頁)

福本、徳田より10日遅れで佐野文夫がモスクワに呼び寄せられたとき、すでに決着がついていた。佐野は福本が自己批判して失脚したことを聞いて顔面蒼白になったという。

意見書を提出して書面上では反論したとはいえ、なぜ、福本は簡単に屈服したのか。福本は奥歯にものが挟まったような言い方で五味川純平の問いかけに応じている。

——この問題（分離結合によって世界党から独立した自主的な党を作ること―岩田補足）、あまりいままではっきりされておられませんね。わたしども後輩は、何でそのとき福本先生が、たとえ少数であっても、論拠を明らかにされなかったかという気持ちがあるんです。

福本 ところが、あそこで一人あくまで抵抗したら、ぼくは命を落とさなきゃならない。

——向こうに抑留されたかもしれないね。

福本 おれは抑留されて消されてますね。

——そういう空気でしたか。

福本 いや、そこまでわかりませんけどね。おれはやらなかったから……。

——いや、そういうことを予感されたんですか。

福本 そう思いました。そうなると思います。

——その時点で……。

福本 ええ、おれはそういうことで命を落とすのは、ばかばかしい。

（前掲『思想と人間―革命の虚像と実像』316―317頁、聞き手は五味川純平）

福本イズムの興隆・失墜はスターリン独裁体制の確立を微力ながら陰で支えた、と言えなくもない。正式の日本問題特別委員会にはブハーリンを主査に、イギリス共産党のマーフィー、フィンランド共産党のクーシネン（1881―1964）、ハンガリー共産党のクン・ベラ（1886―1938、スターリンによって粛清）らが委員として参加し、スターリンも時に出席して発言することもあったという。3ヶ月の討議（実質は一方的な糾弾）を経て、1927年7月15日にコミンテルン常任執行委員会で「日本問題に関する決議」が採択される。

「27テーゼ」はマーフィーが原案を作成したうえで、討論後にブハーリンが執筆した。ここでは石堂清倫・山辺健太郎編『コミンテルン 日本にかんするテーゼ集』（青木文庫、1961年、28―45頁）に基づいて内容を確認していきたい。

テーゼは「日本帝国主義と戦争」「日本における国内情勢」「日本革命の推進力」「共産党とその役割」「共産党と社会民主主義」「共産党と労働組合、共産党と大衆的労働者組織、統一戦線の問題」の6節から成る。「27テーゼ」を目にする機会はほとんどない。次のように概要を詳しくまとめた。

各節タイトル後の丸カッコ内は、筆者がコミンテルンと再建共産党・福本イズムの関係を考慮して付したサブタイトルであり原文にはない。山川イズム・福本イズム批判の箇所は鉤カッコで直接引用した。なお、事実として誤っていると思われる箇所もそのまま記載している。

第1節「日本帝国主義と戦争」（中国革命の意義）

最近の日本帝国主義の強化と侵略性の増大によって日本はアジアにおける第1級の帝国主義強国となった。日本資本主義の死活的利益は中国に結びついている。中国から鉄鉱石、石炭などの資源を輸入し対外輸出の3分の1は中国に向けて送り出される。また、輸出資本の主要な投下地域でもある。日本帝国主義の中国革命に対する敵意は、中国革命の発展が日本の植民地支配に対する直接の脅威であり、朝鮮に波及する恐れがあることによって深められている。

日本の帝国主義者は、中国の労働者農民とソ連との同盟に対抗してアメリカ・イギリス帝国主義と連携するだろう。しかし、日本はアメリカ、イギリスとの間で中国における利害が衝突している。日本は太平洋をはさむ帝国主義的分割の血みどろの闘争へと武装を整えつつある。

第2節「日本における国内情勢」（2段階革命説）

ヨーロッパに比べて著しく遅れて開始した日本資本主義は第1次大戦前後で大きく進展した。日本資本主義はヨーロッパの資本主義諸国とは反対に今日なお発展の上向線上にある。資本主義の急速な発展は封建的勢力とブルジョアジーとの間の内部的闘争と妥協を通じて国家権力それ自体の変質をひきおこした。現在の日本の国家権力は資本家と地主が掌握している。

1868年の革命はブルジョア的発展の道を開いた。政治権力は封建的諸要素（大土地所有者や軍閥、宮廷閥）の手中にあった。日本国家の封建的特質は資本主義の原始的蓄積の礎となる。封建的国家からブルジョア国家への変質は2つの方向に沿って行われた。一方には、産業、商業、金融ブルジョアジーの政治的意義が不断に増大する方向、他方は労働者農民運動にたいする恐怖と帝国主義政策の要求に駆られて封建的諸層と新興ブルジョアジーとの融合が急速に進行する方向である。

ヨーロッパのいかなる国でも、日本におけるほど国家資本主義体

制に近づいている国はない。工業、銀行に投下された資本総額の30%（ほとんどすべてが国家資本家にある鉄道を除外）が国家に属している。天皇は広大な土地を私有しているばかりでなく、多くの株式会社、企業連合体の大株主であり資本金1億円を有する自身の銀行をもっている。

資本集中の過程、産業資本と銀行資本が金融資本へ進展する過程、トラスト化、コンツェルン化の過程は著しく進み、2大政党である政友会と憲政会はそれぞれ三井、三菱のコンツェルンに維持されその利益に奉仕している。ブルジョアジーは封建的勢力との間に対立があるにもかかわらず、労働者農民運動に対抗して封建的勢力と行動をともにしている。

これらの理由から、日本国家の民主主義化、君主制の清算、支配閥を権力から追放するための闘争（ブルジョア民主主義革命）は、不可避免的に資本主義それ自体に対する闘争（社会主義革命）に転化する。

都市における資本主義の暴風的な発展にもかかわらず、農村は技術的社会的経済的に著しく遅れている。土地の欠乏と極度の窮乏が農民を支配する。農業問題の極度の尖鋭化はブルジョア民主主義革命が現実の問題となっていることを示している。

日本では、ブルジョア民主主義革命の客観的諸前提（国家権力構造における封建的残存物、農業問題の尖鋭化）、社会主義革命への急速な転化の客観的諸前提（資本の集中、コンツェルン化の高度の水準、国家とトラストの緊密なる融合、国家資本主義体制の急速な進展、ブルジョアジーと封建的大土地所有者の融合とブロック化）がともにそなわっている。

レーニンは革命的情勢を「客観的革命的情勢」と「主観的革命的情勢」に分けたが、日本の経済情勢が直接に革命を示しているとしても後者の後進性は非常な障害、躓きの石である。日本のプロレタリアートも農民も何らの革命的伝統や闘争の経験も有していない。

農民および労働者階級の窮乏は労働者農民を革命化し「主観的革命的情勢」の発展を促していく。

小ブルジョア層のプロレタリア化の過程は、今や急速に進展しつつある。労働立法は労働者を弾圧する。ストライキと労働組合とは非合法である。婦人は政治的社会的権利を有していない。共産党は非合法であり、党员であるということだけで10年の懲役に処せられる。すべてこれらは大衆を左翼化させるだけであり、共産主義者のプロパガンダと組織の地盤をますます肥沃にしていく。

第3節「日本革命の推進力」（前衛党による指導）

近代日本は資本家と大土地所有者のブロック化によって支配されている。たとえブルジョア民主主義革命の最初の段階であっても、ブルジョアジーが革命的要因として利用されるなどという希望

は完全に捨て去らなければならない。

中国革命からの類推などは問題外である。中国は帝国主義的侵略の対象である。日本のブルジョアジーは第1級の帝国主義勢力である。日本革命の推進力はプロレタリアート、農民である。プロレタリアートはブルジョア民主主義革命のための全勤労者の闘争と結合しなければならない。日本では、地主と資本家の反動的ブロックに対抗して労働者農民の革命的ブロックを作るための客観的前提はすべてそなわっている。農民に対する労働者階級の正しい政策は革命成功のための最も重要な前提の一つである。

農民は、ただ労働者階級の指導の下にあるときにのみ勝利することができる。どの国の歴史を見てもプロレタリアートに指導されない農民運動は常に失敗してきた。人口の過半数が農村人口である日本では、プロレタリアートが農民から孤立することはブルジョアジーに最も有力な武器を提供することになる。

プロレタリアートは唯一の徹底した革命的階級である。農民はプチ・ブルジョアジーに属する。プチ・ブルジョアジーの力は「動揺の力」である。「動揺の力」は革命にとってきわめて危険である。とりわけ社会主義革命への転化の段階においてはそうである。内部的に結束され鍛えられた階級意識に基づく共産党に指導されたプロレタリアートの覇権こそが、「動揺の力」を中立化し克服することができる。

日本においては、労働者階級と農民の革命的同盟のための客観的諸前提は疑いなく不断に存在する。共産主義者は全力を挙げて農民組合を革命的・共産主義的指導の下に結集しなければならない。労働者農民の革命的ブロックは地主と資本家との反動的ブロックに対抗しなければならない。

第4節「共産党とその役割」（山川イズム批判）

労働者階級は勝利することができる。ドイツ・バイエルン、ハンガリー、イタリアの経験は、強固に組織され思想的に鍛錬された大衆の共産党なくしてはプロレタリアートの勝利的革命は不可能である、というレーニンのテーゼの絶対的な正しさを証明した。

どこにおいても労働者階級は完全に同質的な大衆を形成していない。労働者階級の内部には、その生活程度、政治的・文化的・その他の発達水準を異にする種々様々な層が存在する。各層の特殊の利害がプロレタリアートの一般的階級的利害を損なう場合が少なくない。ブルジョアジーは自身の利益のため、社会民主主義や労働組合の代理人の助力を得て分裂を助長しようとする。

分裂と密接に関連して「経済主義」の危険が存在する。労働者階級の政治的に遅れた層では、日常闘争と経済的衝突の過程で提出さ

れる個々の具体的要求が、資本主義それ自体に対する闘争を隠蔽する結果に導いている。

共産党は、全階級の根本的歴史的利益のために闘争するプロレタリアートの革命的前衛である。共産党なくしては分裂も「経済主義」も克服することはできない。共産党なくしてはプロレタリア独裁のための闘争はあり得ない。

日本共産党指導部の主要な誤謬の一つは、共産党の役割の無理解、労働運動における党の特殊な重要性の過小評価である。共産党が労働組合の左翼フラクション、あるいは広汎な労働者農民の党によって代置され得るという考えは根本的に誤りであって日和見主義的である。思想的に鍛錬された規律ある中央集権的な大衆的共産党なくしては革命運動の勝利は決してあり得ない。

「故に清算主義的傾向のあるあらゆる形態一殊にその一傾向が同志 Hossi (山川) 一派に表れている一に対する闘争は、日本共産主義者の最も重要な任務である。全勤労者の一般的利益のための闘争はその最も進歩的な革命部分すなわち労働者階級によって指導されねばならぬ。」(前掲『コミンテルン 日本にかんするテーゼ集』38 頁)

今日、日本における主要任務は共産党の量的質的成長を図ることである。日本プロレタリアートのすべての進歩的革命的要素を陣営内に獲得して一步一步、日本の労働運動における党の指導的地位を獲得し強固にしなければならない。

第5節「共産党と社会民主主義」(社会民主主義との闘争)

現在の状況下にあつては、共産党は社会民主主義に対する闘争を行わずして発展することはできない。社会民主主義指導者はブルジョアジーの代理人であつて、妥協的精神と愛国主義と社会帝国主義の毒素を大衆に感染させている。

日本資本主義の客観的地位と日本労働運動の発展は、社会民主主義勢力と闘う上で有利な情勢を作り出している。日本の労働者階級は数十年の歴史をもつ根強い社会民主主義的組織をもたず社会民主主義的伝統もない。改良主義の主要な基礎である熟練労働者の上層は微々たるものである。平均賃金は極度に低い。プロレタリア化しつつある農村から都市部へ流入する膨大な労働力、農業過剰人口の巨大な重圧によって資本主義下で労働者の生活水準が高まるという望みは絶たれてしまった。日本資本主義が労働者の上層を買収する可能性はある。しかし、アメリカ式の妥協的組合主義を日本に移植しようとする改良主義者の試みが失敗に終わるであろうことは今日すでに予言することができる。

第6節「共産党と労働組合、共産党と大衆的労働者組織、統一戦線の問題」(福本イズム批判)

共産党の独自の組織としての発展こそが日本の革命運動の決定的要因である。この点について「日本共産党指導部の従来の誤謬、就中 Hossi（山川の偽名－岩田注）同志によって代表されている誤謬の急速なる決定的な清算の必要が強調せられた。しかるに最近、他のこれとは正反対の一誤謬が党内において勢力を占めた。この傾向の指導者は同志 Kurohki（福本の偽名－岩田注）である。」（前掲40頁）

日本共産党は大衆党としてのみ歴史的任務を解決することができる。「革命的理論なくしては革命的運動はあり得ない」ことを徹底的に体得しなければならない。しかし、党はまた大衆との強固な結合による革命的大衆闘争なくして理論は何にもならないことを体得しなければならない。日本共産党は目的においても構成においても労働者の党とならなければならない。プロレタリア的核心が何よりも強化されなければならない。共産党を労働組合の左翼に解消させる方針は誤謬である。党をプロレタリアートの大衆組織から孤立させる方針も、それに劣らず誤謬である。

「同志 Kurohki が提唱し、その一派の主張にすぎざる分離結合の理論はレーニン主義とは決定的に又根本的に異なっている。矛盾している。同志 Kurohki は日本共産党に当面する具体的な任務並びに歴史的に与えられたその解決の方法を分析しようともせず、勝手に作り上げられた抽象から出発し現実の関係を明らかにしようと努むる代りに論理的範疇の分離結合の遊戯をなして喜んでいる。」（前掲41頁）

大衆組織は、一方では共産党が新しい力を汲み取る貯水池であり、他方では前衛と全階級、全労働者大衆を結びつける連繋である。プロレタリアートの大衆組織が大きいほど共産党の貯水池の包容力は大であり、共産党が訴えうる聴衆も広汎となる。右派の改良主義、左派の社会民主主義は大衆の貯水池を破壊するが、ボルシェヴィズムとは何ら縁がない。

日本プロレタリアートの最も前進的部分は思想的に急激に生長し、サンジカリズムと純粹労働組合運動から脱却して政治的階級闘争への道を進みつつある。しかし、日本の労働者運動はなお若く、その組織も貧弱である。

プロレタリアートの大衆諸組織創設のために闘うことは共産主義者の任務である。労働総同盟、農民組合等の諸組織の分裂をさせた共産主義者の一派は根本的に誤謬であった。日和見主義者の改良主義者に対する闘争は労働組合、大衆的政党の左翼的分子を分離しないような仕方、大衆を闘い取る仕方で行われなければならない。共産主義者は労働者階級の日常闘争に積極的に参加し、自分たちこそがプロレタリアートの利益の唯一の確固たる擁護者であることを行動によって示さなければならない。日本資本主義が労働者に

対して惨酷な攻勢を展開しつつある今日、このことは特に重要である。

「同志 Kurohki が主張するように労働組合を機械的に政治化する一派は、絶対に間違いであるといわなければならぬ。それは政党と労働組合との差異の絶対的無理解、一つを以て他に代えんとする試みに基づいている。」（前掲42頁）

労働組合を強固化して内部から闘い取る政策は労働者農民の大衆の政党に対する戦術に広められなければならない。共産党の圧倒的勢力下にある労農党と中央派の影響下にある日本労農党の合同を実現するために努力しなければならない。これこそ共産主義者の直接的任務の一つである。

「党と大衆との戦術上の遊離を来すべき同志 Kurohki の見地は又大衆党としての共産党の現実の瓦解を生ぜしむ。この『分離結合の理論』が、純粹な意識的方面だけを過渡に不相当に強調し、経済的・政治的・組織的方面を完全に無視したのは偶然ではない。これはインテリゲンチヤの許すべからざる過重評価、労働大衆よりの遊離、宗派主義（セクト主義—岩田注）に到らしめ、党を目して大部分は知識階級に属し労働者階級の闘争組織ではなくして『マルクス主義的に思惟する人々』の集団なりとの考えを生み出すに到った。共産党は同志 Kurohki もすでに抛棄したこのレーニン主義の漫画（戯画—岩田注）と断固として手を切らねばならぬ。」（前掲43頁）

共産党は統一戦線の戦術を採用する際、決して独自性を失ってはならない。具体的な統一戦線は、非合法的共産党と労農党、統一同盟のような合法的左翼大衆組織との統一戦線だけでなく、共産党の影響下にある大衆組織（例えば労農党）と社会民主主義的または中央派的な大衆組織との統一戦線をも意味する。

資本主義に対する闘争へ労働者階級を組織する場合、共産党は労働者農民の革命的ブロックを創設し、このブロックにおける労働者階級の覇権を確立しなければならない。共産党は日本国家の民主主義化と封建的要素の撤廃を目的とする全勤労者の闘争の先頭に立たなければならない。ブルジョア民主主義革命の社会主義革命への転化の一般的展望を瞬時も忘れてはならない。共産党は日本の植民地における解放運動と密接に連絡を取って思想的組織的支持を与えなければならない。共産党は国際的革命主義の組織として、中国における日本の干渉とソ連邦に対する戦争の準備に対して闘争しなければならない。以上の基礎の上に、日本共産党は次の行動綱領と次のスローガンを掲げなければならない。

1. 帝国主義戦争の危険に対する闘争。
2. 中国革命から手を引け！

3. ソヴェート連邦の擁護。
4. 植民地の完全なる独立。
5. 議会の解散。
6. 君主制の廃止。
7. 18歳以上の男女に普通選挙権を与えよ。
8. 集会結社団結等言論出版の自由。
9. 8時間労働制。
10. 失業保険。
11. 労働者抑圧法の廃止。
12. 皇室、社寺および大地主の土地の没収。
13. 累進的所得税。

これらの要求のための闘争こそがプロレタリアート独裁への道である。闘争は、思想的に鍛えられ洗練されたレーニンの中央集権的な大衆共産党が存在し、世界の共産党と共闘し、コミンテルンと歩みをともにするときにこそ成功するであろう。

日本の代表団が誤謬を承認してコミンテルンのすべての指令と決議を完全に採用することは、日本共産党が正しい政治的組織的方針を採り、歴史によって提起された偉大な任務をよく成就すべきことを理解していることの証しである。

以上が「27テーゼ」の内容である。

「～しなければならない」という命令文が頻繁に出現することは、再建共産党の自主性、独立性が蹂躪されていることを如実に物語っている。山川イズムの扱いが少ないのは、福本イズムによって克服されたと見なされているからであろう。なお、「君主制」の代わりに「天皇制」が使われるのは「32テーゼ」（正式名称は「日本問題に関する新テーゼ発表に際し同志諸君に告ぐ」、前掲120-128頁）である。

1927年7月に採択された「27テーゼ」は8月のソ連共産党機関紙『プラウダ』（プラウダ=真実）に大要が掲載され、全文は翌年2月に『インプレコール』（International Press Correspondence インターナショナル新聞通報）に公表された。

「27テーゼ」採択後にコミンテルンは日本共産党指導部の人事を決定する。新たな中央常任委員は渡辺政之輔、鍋山貞親、市川正一、佐野学の4人であり、佐野以外は労働者出身だった。

立花隆は「27テーゼ」をめぐる動きについて次のように総括した。

日本の党が党大会を開いて全員一致で決定した規約、大会宣言、運動方針、党人事のすべてをことごとくくつがえされて、全面的に新しいものをコミンテルンから与えられるという、世界の共産党史上類例がないできごとがここに起きたのである。しかも、それに対して抵抗らしい抵抗が、日本の党には上から下までまるでなかった。

(前掲『日本共産党の研究(1)』147-148頁)

福本は渡辺、鍋山、中尾、河合とともに同じ汽車でモスクワを発って10月に帰国する。徳田、佐野文夫の出発は1、2カ月遅らされた。帰国後の12月、日光でモスクワへの代表団と留守指導部(市川委員長のほか志賀、三田村、佐野学)の合同中央委員会を開いて「27テーゼ」の確認、新人事の承認を行った。帰国が遅れた徳田、佐野文夫は中央委員会には間に合わなかった。

非合法生活のエピソードを2つ挙げてみよう(『裸像』152-155頁)。

モスクワから日本への帰途、船で上海から青島に向かう航海中のことであった。甲板を歩いていると、若い高等船員が親しそうに「先生、久しぶりですね。どちらへおいでですか」と話しかけてきた。「先生は覚えていらっしゃると思いますが、山口高商で先生の講義を聴いた者です」とも。福本は一瞬びくつとする。本名を名乗ったら船上生活で便宜を図ってくれるかもしれない。しかし、秘密裏に日本を出国した自分の消息が漏れるかもしれない。「私はずっと台湾に住んでいて商用のために乗船しています」と他人のふりをした。

中央常任委員を解任された福本は、12月から市川をキャップとするアジ・プロ部員となり、東京大井町の三井系工場を対象とする工場細胞の所屬となった。細胞とは政党や政治団体の基礎組織であり、小林多喜二に小説『工場細胞』(初出は雑誌『改造』1930年)がある。

帰国後に1ヶ月ほど大阪と神戸の工場を連日歩いて調べていた。工場細胞の組織に役立つような詳細な工場地図を作成するつもりだった。

ある日、阪急夙川駅の改札で後ろから大きな声で呼びかけられる。「やあ、福本君じゃないか」と。一高1年生のとき寮で同室の友人だった。福本は「違います」と叫びながら神戸方面のホームの端に駆け上がった。友人は大阪方面のホームに立って福本をじっと眺めながら、連れの者に「よく似ているのに違うって言うのは変だなあ」と大きな声で話し合っているのが聞こえてきた。